二次元ぷち文庫

魔法少女エンジェルリップス

倉田シンジ

表紙イラスト：恋河ミノル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔法少女エンジェルリップス』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

倉田シンジ

表紙／恋河ミノル

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

渡瀬(わたせ)ななみ

天使と契約して魔力を手に入れた一族の末裔。表向きは普通の女子校生だが、いやいやながらに魔法少女として戦うことに。才能はピカイチだが経験不足が玉にキズ。

クロエ・ミラ・バシュラール

愛称クロちゃん。ななみに力を貸す可愛らしい少女天使。幼い容貌のわりに、ななみの言動には口うるさい。さながら小姑のような存在。

ここは県下トップクラスの進学校、その学内廊下。
さっき設置されたばかりの掲示板には、先週行われた中間試験の成績上位者が大判の紙で貼り出されていた。放課後を満喫する生徒たちが大勢その前に集い、ある者は狂喜乱舞し、ある者は落胆、またある者はそれを慰めている。
その中に、一人の少女があった。
長い髪を後ろに緩く編み上げた地味めな女の子。なのに、その少女は目を引いた。
髪を派手に染めているでもなく、化粧やアクセサリーで飾り立てているわけでもない。セーラー服を基調とした独自デザインの制服も他と変わらず、スカートは短くもなく長すぎもせず。外見も所作も清潔感に溢れて、いかにも模範的な委員長タイプ、といえばまずはわかりやすい。身長は百六十センチ後半で周囲の女の子よりほんの少し高いが、目立つのはそのせいというわけでもない。
その少女に、ふと気づいたクラスメイトが声を掛ける。
「よっ、ななみちゃん、惜しかったねー。三連覇はならずか～」
「あ……ううん、そんなことないよー。三位に入れただけでもすごく嬉しいんだから……」
少女の名前は渡瀬（わたせ）ななみ。
贅肉のないすらりとした体型に豊かな胸元の盛り上がり。結わえられた髪質は細く柔らかで、光に照らされ蒼く輝いていた。スリムな輪郭とすらりとした鼻筋に加え、意志の強

さを感じさせる、わずかに吊り気味の目には生き生きとした光が宿っている。
それは静かな佇まいの中にも凛々しさを感じさせる、周囲の中では際立った美少女だった。
「でもすごいよね。三位ったってトップと五点差だもん」
「うんうん、今回は運と調子が悪かっただけ。次はきっとトップに返り咲きだよ！」
ななみの周囲にはすぐに人が集まる。今回も、美少女の健闘を讃えてクラスの友人たちが集まりだしていた。その騒ぎ立てる声に、照れ臭そうに応える少女。
「そ、そんなことないわよ。精一杯やっての結果なんだから……上位の人がわたしより頑張っただけだよ、きっと」
端正な顔をはにかませて謙虚に言うななみの言葉にも、いやみったらしいところはない。
生徒会の役員というわけでもなく、クラスを引っぱるリーダーという柄でもない。しかし、ななみは男女問わずに人望と憧れとを抱かせる人柄を持っていた。
成績もよく性格は控えめで好人物、加えて大和撫子的な見目麗しさともなれば、その人気は言わずとも知れる。
「あーん、ななみぃはいい子だね～。あたしが男だったらほっとかないよぉ」
「なに言ってるの、女だって放っておかないんだから」
「そうそう。ね？　ななみちゃん、また勉強会を開こうよ。足引っぱらないようにするか

らさー、また家に行っていいでしょ？」
いつの間にか少女の周りには仲よしグループのような輪ができている。
「ふふっ……うん、いいよ。またお菓子を作って待ってるから、いつでも遊びにきてね」
ななみはその中心にいた。

※

六百年ほど前、南米大陸に妖穴と呼ばれる時空の大穴が空いた。
そこから溢れた魔物は大航海時代の船と共に地球上に広がり、闇に紛れて人間を苦しめ、増殖し……結果、世界は人知れず滅びかけることになる。
が、その時、奇跡が起こった。
キリスト教の教義とも違う、ましてイスラム、仏教の教義にもない「天使」の降臨。不思議な力をもたらす彼らの啓示を得て、ごく一部の者たちが立ち上がる。
彼らは同じ仲間を捜し、一族となり、世界中で魔物たちと戦った。
魔を封じ、魔を滅するための力……魔法。人種も話す言葉も違うその一族は、命を懸けて魔物と戦うことを誓う代わりに魔力を得て、勇敢に戦った。
百年をかけて、一族は妖穴の封印と地球上からの魔物の駆逐に成功する。
ただし、魔物自体を完全に滅するには至らなかった。それ以降現在に至るまで、魔物と人間との小競り合いは続いている。五十年に一度、封印された妖穴が緩むせいだ。

その時々によって世界のどこかに時空の歪みが生じ、妖穴の隙間から魔物が漏れ出てくる。放っておけば魔物は増殖し、手がつけられなくなるのは火を見るより明らかだ。
ならばどうするか。
天使の啓示を受けた一族の戦いは、まだ続いている。

※

「まったく……。なんでよりによってここに穴が空いちゃうかなぁ……」
少女はそう呟いて、校門の前に佇んでいた。
「ふむ。それはしょうがないであろ。そういう運命と諦めるしかあるまい」
その隣にいるのは……少女よりも一回り小さな人影。
「ななみは愚痴が多すぎる。一族としての誇りが足りないのだな」
そんな小言を続けている人影をよく見れば、なんと身体が透けている。
「あーもう、クロちゃんは固い。固いよ」
げんなりするななみも格好が異様だ。いつもと違って、髪もポニーテールだ。
身体にぴったり密着するスーツは水着かレオタードのよう。それと違うことを窺わせるのは、身体のところどころになめし革のような素材の補強具や、胸や太腿、腕にプロテクターのような白銀の防具があるせいだ。金属製のハチマキのようなサークレットからは、ぼんやりと白く輝く羽が生えている。まあ防具に見えないこともないが、胸元に結ばれた

リボンや、衣装のそこかしこにある飾りとしか思えないヒラヒラはなんなのだろうか。
「こないだの中間試験だって……前日に魔物が出なければトップになれてたのよっ」
ブツブツ言っているななみに、クロちゃんと呼ばれた人影が冷めた視線を送る。
こちらの格好も独特だ。年の頃は十二、三歳といった顔立ちも可愛らしい少女だが、髪の毛はプラチナブロンドで格好はいかにもファンタジー世界の住人。頭の上にはティアラを載せ、古代ローマかなにかの彫刻で見るような一枚布をドレスのようにして身体に巻いている。胸を覆う布と腰を覆う布はセパレートで水着に見えなくもないが、その素材もまた不思議なことにうっすらと光り輝いていた。
そしてなりより、背中には大きな純白の翼がある。身体が透けていることといい、常人でないことは明らかだった。
「なによぅ？　なにか言いたそうじゃない？」
ななみが視線に気づいて鋭い視線を向けても、クロちゃんは怯まない。
「まったく、そんなだからお主には天使の一族の誇りがないというのだ。実はななみが、こんなプライド高い、子供っぽい優等生だと知ったら、学友はどう思うのであろうな？」
「またそんなことを言う……。いいんですよーだ。学校でのわたしが本物なの。ここで、天使の一族として、こんな恥ずかしい格好してるわたしはあくまで仮の姿なのっ」
天使の一族……それは、五百年前に天使の助力で妖穴を封印した一族。

ななみはその一族の末裔だった。

五十年に一度の再封印が必要と一族の会議で判断されたのが去年のこと。妖穴がこの日本、この学校周辺に確認されたのも去年。漏れ出てくる魔物の討伐役にななみが任命されて隣にいる天使が派遣されてきたのも去年のことだ。

妖穴の封印には何年もの年月と一族総出の魔力を必要とする。だから漏れ出てくる魔物の討伐に大勢の人員を割くわけにはいかない。そのため、討伐役には一族の中でもっとも魔力の高い者が選出されるのが恒例だった。それが、今回はななみだったというわけだ。地理的に、ななみが住んでいる日本が妖穴の出現場所だったという理由もある。

（それにしたって……）

ななみはふうと溜め息をついて視線を落とした。

こっそり自慢にしているスタイルのいい身体のラインが、密着スーツのせいではっきり見て取れる。胸は谷間もはっきり分かるほど張りつめているし、肩胛骨のでっぱりまで分かるほどだ。股間もスカートプロテクターがなければハイレグといっていいくらいに食い込んでいるし、それをめくれば恥骨のでっぱりすら分かってしまう。実に恥ずかしい。

とにかく、通常のななみとはかけ離れた格好だった。目立ちすぎず出しゃばらず、能ある鷹は爪を隠す的なポジションを理想とするななみだ。派手な格好はキライだったし、虚飾で自分を必要以上によく見せる必要もないというのが信条だ。

それが、こんなコスプレめいた格好を……というより、この魔法少女というのがまず想像と違う。自分が幼い頃から聞かされてきた一族の戦いの歴史は、もっとこう、重厚で血なまぐさくて、こんなひらひらした衣装とはかけ離れたものだったはずなのだが……。

「なんの溜め息であろうな？　まさかその衣装に文句でもあるのか？」

クロちゃんがじとっと睨めつける。

本名、クロエ・ミラ・バシュラール。一族の偉い人につけてもらった名前だそうだが、この尊大な口ぶりもそのお偉いさん譲りなのだろうか。

クロエは天使という出自にふさわしい、可憐な顔立ちをしている。幼さと、凛々しさと、儚さと……それらがない交ぜになった、人形のような可愛らしさだ。その、妙に格式張った口調と年寄りめいたお小言さえなければ、だが。

ななみはこの天使と出会って半年足らずだ。天使というだけあって実際は何歳なのやら……。口ぶりから言っても、人間でいえばかなりの年齢な気がする。訊ねてはみたいが、実際に聞いたらぐったりしそうなので聞かないことにしていた。

このコスチュームも彼女の創造によるものだ。一族の者は天使の力を借りて魔力を顕現させる。この防御力に乏しく見える衣装も、魔物相手には絶大な力を隠し持っていた。

「天使の一族たる者、可憐で美しく」。それがクロエの口癖。この衣装も伝統と美しさを兼ね備えた理想の戦闘衣だそうだが……能力はともかく、外見に多分に彼女の趣味が入っ

少なくとも一時撤退して天使の復帰を期することが出来る。ただ、そうしてしまえば無防備になる校舎の中がどうなるか……。代わりに生け贄とされるのはクラスメイトたちだ。

打つ手のない少女の脳裏に、魔物の欲望思念が押し寄せてくる。

「ひっ！　あ、うぅ……」

思わず息を呑んだ。欲望にまみれた思念は、ななみにあるイメージを浮かべさせる。

あられもない姿で、淫らによがり狂う自分。

（だ、だめ！　そんなことあるわけない！　こ、このわたしが……！）

ぞくりとした悪寒が背筋を走る。それは触手に身体を這い回られる嫌悪感とはわずかに質の違う、被虐的な香りを持った感覚だった。

（ああもう、穢れた思念に毒されてはだめだってば……！　だめ……っ！）

しかし、彼女の自らに言い聞かせる努力も実を結ぶことはない。

「は……ひっ！」

ぴくんと背筋が伸びる。たぷんと跳ねた少女の乳房が、これ以上ないほどに締めつけられていた。根元をぐるりとひと縛り。そして絞り出された肉をもうひと回り。張りのある肉がらせんを描く肉手に縊り出されていく。

ぎちぎち……。太さ三センチ程度の触手が、ねばついた粘液を染み出しながら柔肉に食い込んでいく。密着スーツは生の肌そのままに触手の間に乳肉を盛り上がらせて、いまに

えっちシーン試し読み
コミカルスタート!

も弾けてしまいそうだ。
『これくらいで音を上げるのか？　天使の使徒……』
「耳障りな……声……だね……」
頭に響く腐の王の声を無視出来ず、ならばせめてと出した反抗の声も力がない。自分を奮い立たせようとしているのに、声の力のなさに不甲斐なさを感じるばかりだ。
絞り出された乳肉の先が、とぐろを巻いた触手に嬲られる。
『どうしたどうした？　心が乱れているぞ？』
少女を目の前にひざまずかせて、魔物は複数の眼球で見下ろしてくる。
「ん……！　そ、そんなこと……！　はぁ、……っ」
見透かされたようで、思わず少女は顔を伏せた。だがその身体は……。
乳房の先端を舐めるようにして、吸いつくようにして、触手の先端が行き来している。締めつけられた乳肉はちりちりと痛み、苦しいほどなのに……。
（だめ……だって……。なんでよ……こんなの……）
柔肉の先端がむずむずしている。痛みとない交ぜになった緊張感のせいか、密着スーツを盛り上げるようにして乳首が反応していた。
ぷちっと浮かんでいたわずかな膨らみが、触手のひと撫でのたびにむくむく頭をもたげていく。それに引きずられた乳暈もわずかに盛り上がりを増して敏感さを強めていく。

それがどうしようもない生理的な反応だとは分かっていても、ななみにとっては少なからずのショックだった。動揺が勢いづいていく。頭が混乱する。

「んく……、は、ふ……はぁ……はぁ……」

いつしか、口から漏れ出るのは苦しげな吐息ばかりになっていた。自分を励ます憎まれ口を叩くことすら困難になりつつある。

乳房の先端に盛り上がった乳首の影はやや小さめ。極薄のスーツをぴっちりとまとった膨らみは、皮膚のわずかな窪みさえも映し出している。

「っ……！　ふ、んんっ……っ」

円筒形に伸び上がったその突起が、ぷるんぷるんと弾かれる。目を閉じ、唇を噛んで、その感覚を無視しようと努めるななみ。

（いけない、結界が……！　んっ！　し、しっかりするの……！　わたしはエンジェルリップスなんだか、ら……！　はぁ……は……ぁ）

頭の中を掻き回されるような感覚に翻弄されればされるほど、彼女一人で支えている結界の力が弱まるのを感じる。本来は聞こえないはずの、授業の終わりを告げるチャイムが遠くに聞こえていた。

（じゅ、授業……終わっちゃった……。せっかく、予習してきたのに、な……）

呆然と思うななみに触手が這う。すでにもう片方の乳房にも触手は伸び、同じように絞

り上げていた。
うっすらと開けた目の下に、いびつに引き絞られた二つの乳房がある。そこにとぐろを巻く二本の触手が、先端をぷるぷる転がして……。
彼女が見る目の前で、触手たちの先端が割れた。まるで口が開くように、あるいは彼女が見慣れない男性器を模したように、丸まった触手先端に縦割れが走り、にちゃっと糸を引いて割れていく。
「あ……ああ……」
ななみには予感があった。それらの開いた口が、何をするつもりなのか。
ぷじゅっと音を立てて、両の乳首が二つの口に呑み込まれる。そして一気に、
じゅじゅっ、ずるるるる！
「ひあうっ！　あああ、うくぅ……！　んんんっ！」
吸引されると同時に、ななみの表情がくしゃっと歪んだ。
『おや？　人間よ、ずいぶん楽しげな思考を漏らし始めたな？　どうかしたのかな？』
「ひぅ！　は、離れ……なさいよぉ！　やっ、やあああっ！」
眉を寄せ髪を振り乱す少女の頬に、ぽっと羞恥の赤が差す。
正確には恥ずかしさだけではない。その感覚……伸び上がった乳首を、ずるずると吸われる感触に背筋がざわめいていた。

思いきり身体を揺らし、吸いつく口を引き剥がそうと身をよじる。だが両手両足、腰も太腿にも巻きついた触手は軽々とその動きを抑え込んで彼女の自由を奪う。

（はぁぁ……！　こ、怖い……なんなのぉ……）

きゅうきゅうと胸の奥が疼いている。その感覚は彼女にとって未知の脅威であり、畏怖の対象でもあった。

ななみだって年頃の女の子だし、それなりに性の知識はあるつもりだ。しかし、いま感じているこの不思議な感覚はなんだろうか。無理やりに、しかも魔物に弄ばれているのに身体が熱い。少女の常識では、こんな状況で感じるなんてあり得ないことだった。

『人間の女は弱いな……弱い弱い……』

自分を馬鹿にする魔物の声に胸が軋みを上げる。人間の身で百戦錬磨の魔物に逆らおうなどと、所詮は身の程知らずなのかもしれないと弱気が顔を覗かせる。

少女の動揺をさらに誘うべく、触手が足を広げていく。

「やめなさい、よぉ……！　うう……ぅ……」

いくら身体を揺すってもその動きに逆らうことは出来なかった。地面に膝をついたまま股を広げられ、身体がわずかに前傾する。

後ろに突き出された股間のすぐ下、太腿に巻きついていた触手がずるずると這い上がっていく。それはショーツの上に粘液をなすりつけ、じわじわと少女の中心に迫る。

「やだっ、やめてぇ……！」
泣きそうな顔で振り返り、でたらめに尻を振りたくるななみ。
その臀部を撫でるようにしながら、貼りついた触手は秘裂を押し込んだ。
「はうっ！　やだっ！　やだぁぁっ！」
ぐにっとへこまされたショーツが、秘所をずりずり擦って嫌な感触を送り込んでくる。
ぐちゅっ！　ぶぶ……にちっ！
いつしか、ななみの身体にまとわりつく触手たちはすべてが先割れし、そこからドロドロした粘液の塊を吐き出し始めている。その量は唾液どころではなく、彼女の身体はすぐにゼリー状の透明粘液でぐしゃぐしゃにされていく。
「うぷ……んんっ、く……気持ち悪いぃ……」
頬にすり寄ってきたモノがどぷどぷ粘液を吐き出す。ねっとりと垂れ落ちたそれは顎から胸元へ滴り落ち、やがて乳房に塗りつけられるゼリーと混ざりあう。
触手が一斉に動いていた。
乳房を締めつけていたモノが蠕動しながら揉み込みを開始し、首から頬に首をもたげたモノは端正な顔を生臭い粘液で穢していく。むろん股間にも吐瀉されたゼリーが貼りついて、それをショーツに染み込ませるように触手が動く。
ゼリー塊が押し潰され、水分がぐちゅっと音を立ててショーツに滲む。

初めてを散らされた衝撃よりも、初めてそこに異物を受け入れた衝撃が遥かに強い。身体の内側の粘膜が擦られているだけなのに、とてもそれだけとは思えない不思議な心地よさがある。それは気を許せばすぐに脳裏を占めてしまいそうで……。

自分の中に入り込んできた物体に向けて、膣はひとりでにきゅっと吸いついている。感触だけでその形すら説明できそうなほどに、男根触手の存在を感じてしまう。

「はぁ……ああぁ……」

苦しげな表情とは裏腹に、その口から漏れ出たのは甘やかな吐息。

そこに、窓を隔てた生徒たちから冷水を浴びせる言葉が投げかけられる。

「渡瀬さん……化け物に犯されて……感じてるのか？」

びくり、と背が震えた。

「……っ！　ち、ちが……！」

一気に現実に引き戻された。誰がそんなことを言ったのか、思わず目を落とすななみの目に、生徒たちの顔が飛び込んでくる。

彼女を見上げる表情は、いずれもが驚きと嫌悪感と恐怖を浮かべていた。それは同類に向けて向けられる視線とは違う。自分とは違う何か、理解できない者を見つめる目だった。

「あ……ううっ、ちがうの、わたしは、魔物と戦って……それで……！」

短い説明ではどうせ理解など出来るはずもないのに、そうせずにはいられない。自分は

ノクターン 試し読みスタート

あなたたちと何も変わらないのだと訴えかけたい。分かってほしい。
だが……、
「っ、ひゃあぁぁんっ！」
ずりゅ！　と突き上げてきた触手に子宮を叩かれた途端、思考が途切れてしまっていた。腹の奥深くにじわっと熱が広がり、膣襞から愛液が滲み出る。足の爪先をぴんと伸ばさせる心地よい痺れが脊髄を震わせ、脳に到達して思考にかすみをかける。
「はぁ、んっ、んんっ、うあんっ！　んは、ふあぁぁぅ！」
逆らいがたい感覚が胸の奥からもぞわぞわ湧き上がってくる。声を抑えられず、表情が淫らに歪むのを止められない。
ぬるぬると抜き出された触手が角度をつけて突き込まれると、股間からは止まっていた小水が勢いよく噴き出した。
『他の皆にも見せてやるとするか』
魔物のきまぐれな声によって、触手が彼女の身体を運んでいく。
その頃には、他のクラスもこの異常事態に気づいていた。教室から出られない状態で、隣のクラスから聞こえてくる異様なざわめきにやきもきしていた彼ら。生徒たちは最初のクラスと同じように窓際に駆け寄り、姿を現した魔物に驚いて、やがて少女に気づく。
「渡瀬さんだ……！」

そのクラスはななみの所属するクラスだった。クラスメイトは口々に驚きの声を上げ、魅入られたように魔法少女の姿から目が離せなくなる。

丸くにゅっと広がった膣口が、醜悪な触手をくわえ込んでいた。

いったん退いた触手頭が膣口裏をくすぐるように蠢き、そしてにゅぷぷっと潜り込んでの繰り返し。それは巣穴に戻るウナギのように、うねうね淫らな動きで出入りしている。

「ひぁう！　やぁ……見ないでぇ……みんな、お願いだから……っ、こっちを見ないで……っく、ふぐっ！　んくっ、んぐうううぅ……!!」

再度、口腔に突き込まれた触手が脈動し始める。毒液をどんどん流し込むホースとなって、それは魔法少女の身体に否応なしの反応を起こさせて休息を許さない。

「むぐ……ふっ、んむぅ！　ごほっ、もう……、ひゃめて……ぇ……」

どんどん腹の中に溜まっていく触手体液はまたしてもすぐに浄化された。そして彼女の小水となって……十数秒後には、ひくひくしている尿道を強烈な排泄欲で盛り上げる。

「なんだよ、おい……。渡瀬さん、まさか……！」

窓の外の光景に教室がざわめく。

閉じこめられた生徒たちの視線が、一斉にななみへ向けられていた。

「ぐ、あぁぅ……ふぁ……んむむっ！　んぐんん――っ！」

口腔を犯されたまま、少女は必死に尿意をこらえ、首を振りたくった。

しかし、その努力も報われることはなく……。
ひく……ひくひくっ……！　ピュッ！　プシャアアッ！
大きく割かれた股の中心で、さらに広げられたヴァギナの艶めかしいサーモンピンク。そこに開いた小さな尿口から、限りなく透明に近い液体が迸る。
「っぷぁ！　見ないで！　いやあああっ！　降ろしてっ！　降ろしてよぉ！」
一時だけ触手を吐き出し、子供のように首を振りたくるななみ。触手の群れは彼女の身体を縛めたまま、それどころか窓に近づけて少女のプライドをずたずたに引き裂く。
びしゃしゃしゃ……窓ガラスにぶち当たり、飛び散る小水。その向こうにあるのはクラスメイトたちの顔、顔、顔。距離にして一メートルあるかないかだ。いずれも信じられないものを見る目でななみを……もっと正確に言えば、ヴァギナに異物をくわえ込み、尿道をひくつかせながらおしっこを漏らす股間の様を凝視している。
「う……ふ、ぐぅ……うむぁ……ひゃめぇ……もう、ひゃめてぇ……」
友人たちの顔へ放尿しているような罪悪感と、なにより彼女を傷つける羞恥心。上の口も下の口も塞がれて、少女は我慢できずに括約筋に力を込めた。
「んく！　あ……、や、あああっ！　当たるっ、当た……ひっ、んくっ、ひいあぁっ！」
そして……一緒に締まった膣壁の締めつけによって、膣内に蠢く触手を圧迫してしまう。
途端に、ぎゅっと締まりの強まった膣口からは強烈な疼き。触手胴体に密着した膣内の

粘膜が、暴れる触手にこりこりと掻きくすぐられてしまう。
「うっ、ううぅっ、ん、ふむあぁ！　んっ、んんぶっ、くっ……ふぁ、ひいぁあっ！」
下腹から生まれて身体中にぞわわっと広がっていく甘美な痺れで、ななみは乳首の痼り立った乳房を揺らし、涙の浮いた目を細めてがくんと身体を跳ねさせた。
小水は一時的に堰き止められたものの、完全には止められずに漏れ出ている。触手がヴァギナをえぐるたびに、尿道がひくついてびゅるっ！　愛液と小便でぐちょぐちょになった股間は級友にさらけ出され、少女には隠しようもない。
「ひはっ！　ああう！　やぁぁんふうっ！　おなかの中がぁ……んくぅ！　擦れるっ！擦れて……ふぁああんんっ！　やだぁ！　んんっ、ひゃふううっ!!」
ぷしゃあああああああっ！
せっかくの努力も虚しく、再び放尿を開始してしまう膀胱の排泄欲求。
放尿の解放感や罪悪感、そしてそれらと混ざりあう、えぐられる膣口の快楽。
（くっ、んふうっ！　き、きもち、いい……？　魔物なのに……無理やり犯されてるのに……あ、くあああんっ！）
がくんがくんと揺れる視界に唖然とした顔の級友たちを見つめながら、少女はそれを認めようとしていた。
『どうした？　ほしいものがあれば自分でねだってみせるがいい』

魔物の思念は的確で、彼女の心へ確実にひびを入れていく。
「はぁぁ……うう……」
ななみの瞳が苦しげに細められ、視点が宙をさまよう。
「お、おっぱい……が……疼く」
無意識に呟いていた。すぐ反応して乳首に食いついてきた口付き触手が、こりこりと痼りを潰している。ジンジンした心地よい痺れが乳房の肉を蕩かせる。
「はぁ……あああん……」
満足げな吐息を漏らして、少女は吸われる乳首に熱い視線を送った。
「あそこも……く、クリトリス……も……」
言葉尻に見られるわずかな躊躇も、完全に口をつぐませるまでには至らない。求めれば与えられる快楽の刺激に、理性は影を潜め、本能の言いなりになってしまっている。
ぬるりと陰核の突起をひと撫でした触手が、包皮を押しのけたくて仕方がなさそうにしていた肉粒をきゅっと押さえ込んだ。
「ひふうっ！」
しっとりした髪や露出した乳房を大きく揺らして、押し出されたエンドウ豆のようなクリトリスが顔を覗かせる。
「んはぁぁ！　擦ってぇ……んふうっ！　もっと、はぁんっ！　そこぉぉぉ……」

少女は腰を振りたくって、包皮を剥きあげた敏感陰核を触手の胴に擦りつける。
むにっとひしゃげた肉豆が目の前に火花を散らし、ぞくぞくする快美感を全身に伝播させる。触手をくわえた膣肉が連動して激しく蠕動を始める。
「はぁぁ……すご……んひゅふうっ！　コリコリして気持ちいいのっ、乳首もクリトリスもっ、気持ちいいいっ!!」
大きく背を反らして、少女は自分で腰を押しつけていく。
「あふっ、んっ、んんっ、んくうっ！」
差し出された触手を自ら口に誘い込むようにして含むと、
じゅぶっ！　ずじゅるるっ！　ちゅぼぼっ！
卑猥な音を響かせて体液を嚥下し始めた。
「っ、ぷふ……はむ……んん！　くぁ……む、くふぅ、んく、んく、んく……」
身体が覚えている放尿の解放感をもう一度味わいたいと、自ら苦況に踏み込んでいくななみ。その瞳は視点を定めることはなく、何もない中空を見つめるばかり。
「ああ……きたぁ……。おしっこ、きたよぉ……！　あっ、はあんっ！」
下腹に膨らむ尿意とともに、もうひとつ、未知の切迫感が湧き上がってくる。少女は本能で、それがなんであるかを感じ取っていた。
「あはぁ……ううっ！　イクの……っ、もう、イクうっ……！」

絶頂という終局を目の前にして、ななみは理性をかなぐり捨てる。
「あうっ！　つ、突き上げてぇ！　もっと強くっ、内側から擦ってぇっ！　んぁあ！　ああーっ！　そこぉっ、いいのっ、イクぅ！　イキそぉだよぉ……!!」
膣内がきゅんっと締まりを強くして、ぬめつくヒダが触手にまとわりついた。魔物の先端もそれに応じて蠢きを強くし、膀胱を膣側から押し込み、肉襞を掻き擦りながら子宮を突き上げる。
ずりゅりゅっ！　と鋭い突き込みにヴァギナ内部を丸ごと鷲づかみにされるような感覚。少女の身体が大きく仰け反り返り、乳房をぷるんと震わせる。
自らも腰を落とすと同時に、彼女は盛大に放水を始めていた。
ぷじゅっ！　ぴゅるるっ！　ぶちゅちゅちゅっ！
愛液のしぶきと小水のそれとが交差する。
芳しい汗と愛液が飛び散り、眉の落ちた卑猥な表情に一瞬で悦びが満ちた。
「あっ、んんんっ！　あはぁあ……イクううっ！　んふ、はぁぁんっ！　イクイクイッちゃうっ！　わたしっ、イクよぉぉぉっ!!」
級友が見守る羞恥の舞台の上。ななみは放尿しながらの淫ら絶頂に瞳を潤ませ、端正な容貌を快楽の荒波に蕩けさせていた。

※

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/